

GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報

No. 31

July 2018

Contents

- 02 研究科長メッセージ
- 03 講座紹介
国際政治経済論講座
多文化共生論講座
- 05 日本学国際共同大学院
- 06 グローバルガバナンスと
持続可能な開発プログラム
- 07 附属言語脳認知
総合科学研究センター
- 08 修了者からのメッセージ
阿部 純
折笠 芽衣
黄 利斌
- 10 退職教員からの言葉
藤田 緑 教授
横川 和男 教授
石幡 直樹 教授
- 11 新任教員紹介
ゴダール, クリントン 准教授
中山 真里子 講師
- 12 研究紹介
- 13 最近の著作から
- 14 平成30年度
科学研究費補助金採択一覧
- 15 INFORMATION
○キャリア講習会報告
○国際文化基礎講座報告
○国際文化学会：学会の休会について
○シンポジウム・講演会報告
- 16 入学試験情報



研究科長メッセージ

「人生100年時代」の大学

国際文化研究科長 小野 尚之



「人生100年時代」とは、最近よく耳にすることばです。幸か不幸か、現代の日本に生きる私たちは、人生100年を想定して生きなければならない時代になったようです。このような流れを受けて、政府は「人生100年時代構想会議」なるものを立ち上げました。その目標は次のように謳われています。「一億総活躍社会実現、その本丸は人づくり。子供たちの誰もが経済事情にかかわらず夢に向かって頑張ることができる社会。いくつになっても学び直しができ、新しいことにチャレンジできる社会。人生100年時代を見据えた経済社会の在り方を構想していきます。」(首相官邸ウェブサイトより)

「人生100年時代」を考えなければならなくなった理由は、今後益々進むであろう少子高齢化社会への対応に一刻の猶予も許されないという危機感があるからです。この目標の中にある「いくつになっても学び直しができ」という部分が、大学の果たすべき役割に最も深く関わる部分でしょう。このような社会情勢を背景に、本学で進行しているいくつかの動きと国際文化研究科の取り組みについてお伝えしたいと思います。

本学はこの4月から、大野英男新総長が就任し、大学の運営体制も一新されました。昨年度、本学は東京大学、京都大学とともに「指定国立大学法人」に指定されましたが、この構想は、新体制の下でも実現に向けた一層の展開が図られるものと思われます。指定国立大学とは、「世界最高水準の教育研究活動の展開ができると、その実力と潜在能力を認められた国立大学であり、日本を代表する大学として世界の発展に大きく貢献することが期待される」大学であると謳われています。国際文化研究科

は、その構想の一端を担うべく、二つの国際共同大学院プログラム「日本学国際共同大学院」と「災害科学・安全学国際共同大学院」に参画しています。平成29年度には、両プログラムともカリキュラムなどの基本構想を終え、いよいよ平成31年度から本格始動する運びとなりました。これら新しいプログラムの目玉は、海外機関との連携と大学内部組織の連携強化です。今までなかったほど部局間の垣根を低くして、時には相互に乗り入れる形でプログラムを展開することになります。

もう一つの動きは、特に大学院を中心とした教育組織改革の流れです。これは実は数年前から始まっていました。少し前に人文社会科学系の学部・大学院の組織見直しが求められたことは記憶に新しいところです。また、全国の大学を評価する「認証評価」において教育の内部質保証がより重点的に求められるようになったのもこのためです。こうした動きによって、本学の教育組織改革の推進が今後大きな課題となって現れてくることは間違いありません。この改革への動きは、先に述べた指定国立大学構想と無縁ではありません。なぜなら、教育の質保証で見直すべき問題として、博士後期課程の定員充足率があり、指定国立大学構想の新たな大学院教育の仕組みづくりもここに直結してくるからです。

若年人口の減少は今後一層加速するのは間違いありません。新卒入学者数は大学院といえども減っていくでしょう(すでに現状がそうなりつつあります)。とすれば、「人生100年時代」では、先に述べた「いくつになっても学び直しができ」ことが大学に求められるようになると思われます。しかし、これは実は日本ではなかなか定着しなかったという現実があります。かつていわゆる「生涯教育」や「リカレント教育」が脚光を浴びましたが、結局尻すばみになって終わってしまいました。日本における「学び直し」が現実とかけ離れていることを示すデータもあります。OECDの調査によると、高等教育機関への入学時の年齢で25歳以上の学生の比率は、OECD加盟国の平均が21%なのに対して、日本は1%にも満たないそうです。この数字は、日本において社会と大学を行き来することの難しさを浮き彫りにしています。しかしそうは言っても、新しい大学院教育の仕組みづくりにおいてこの問題を避けて通るわけにはいかないというのもまた現実です。

人生100年時代が人間にとって幸か不幸か、すべてこれからの私たちににかかっているとと言えるでしょう。

講座紹介

国際政治経済論講座

従来の政治学・経済学の枠組みを越えて複合的な視野に立ちながら先端的で新たな知を構築し、グローバル化のなかの日本とアジア、日本とアメリカ、アジアとアメリカ等の政治経済関係にフォーカスを絞り、世界をリードする教育研究の遂行を目指している国際政治経済論講座は過去の3年間、広範な知識と独創的な分析能力を備えた人材の育成に努めてきました。昨年度は、修士課程の学生が2名修了し、それぞれが社会に貢献しています。今は、本講座に修士課程の学生が6名在籍しています。

本講座の学生は新たな知識を積極的に吸収しながら、多様な研究課題に取り組んでいます。例えば、米中国交正常化の史的

研究(1977-79年)、国際人権論としての「慰安婦」問題、第四次中東戦争とエジプト・イスラエル和平交渉、資本構成と収益性との関係、経済成長と技術進歩との関係などです。学生から講座の講義や総合演習を通して、ある問題をめぐって、先生と学生との交流を深めたりして、研究の仕方や課題の解決方法を培うことができたことと好評を得ています。一方修了した学生は、教員の懇切な指導で、直面した問題から逃げず、自分自身としっかり向き合い、粘り強く取り込み続ける大切さを教わったからこそ、研究の新規性と独自性を生み出すことができたという感想を述べています。



■ 多文化共生論講座

日本も多文化社会を迎えている。自治体によっては住民の20%以上を外国人が占めるところもある。エスニシティや文化的背景を異にする人々が互いの相違を認め合い、対等な関係を築きながら、地域社会の構成員として共に生きていく社会を構築し、多文化社会から真の多文化共生社会へと転換を遂げるには、多くの課題が山積している。

本講座では、異なる言語的・社会的・宗教的バックグラウンドを有する個人や集団が、他者の存在を尊重して友好的関係を築き、互いに干渉や加害することなしに共存する様態や原理を探究するとともに、個人やエスニック集団の対立の心理や民族問題惹起の要因を考察することで、多文化共生への障害と克服の方途を探る。教員の多様な専門性を踏まえ、問題設定や分析視

角の学際性を大切にしながら授業を展開し研究指導にあたっている。

十余名の所属学生のうちの多くは外国人留学生で、互いに啓発し合いながら和気藹々と演習などが営まれている。研究分野も、文学論、比較文化・比較思想、民俗文化論、文化人類学など多岐に分かれる。「さまざまな研究対象に向き合う学生たちと、多様な専門のスタッフが緩やかな共通性のもとに集う本講座は、まるで大きな家族のようだ」との一学生の感想を紹介したい。学生にとってじっくりと夢に向き合うことができる理想的な環境だとも評してくれた。講座自体がいわば多文化共生社会のミニチュア版をなしているのである。



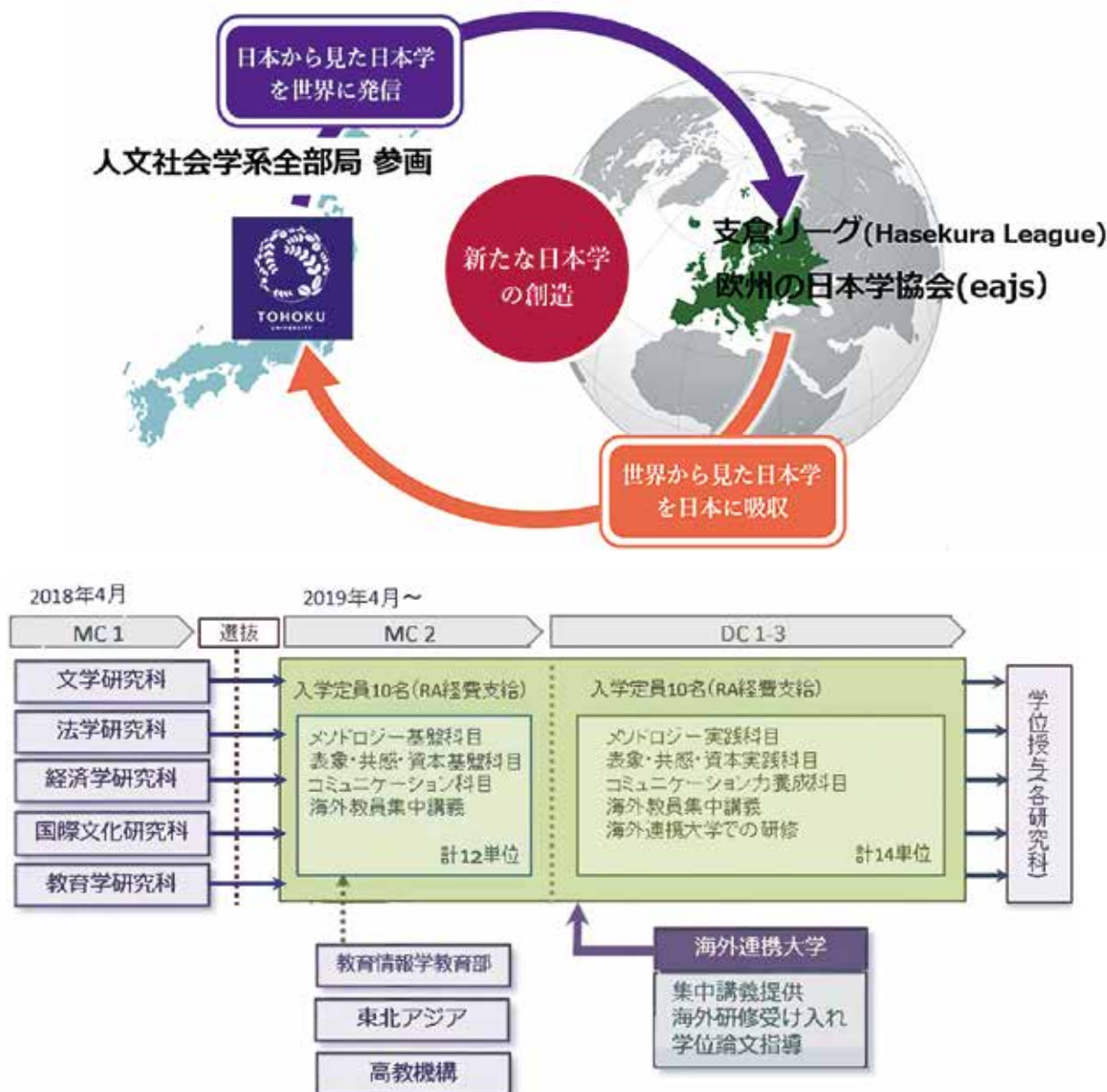
日本学国際共同大学院

今、日本の大学で「日本学」が静かなブームになっています。日本独自の文化や歴史に重点を置いたこれまでの日本研究の枠組みを超えた、国際的・学際的な視点からの総合的な日本研究です。本研究科では、長年、東アジアの主要大学と日本学の学術交流、特に学生の研究発表を主体にした国際共同教育ワークショップを実施し、2015年には国際日本研究講座を新設し、新たな日本研究を推進してきました。

今年度、本研究科をはじめ東北大学人文社会系の全研究科が参画する博士前期・後期課程一貫の共同大学院学位プログラ

ムである日本学国際共同大学院が発足しました。海外の大学と連携し、「表象」「資本」「共感」という切り口から多面的かつ創造性に富む日本学のプラットフォーム構築することで、「日本から見た日本学」を世界に発信し、「世界から見た日本学」を日本に吸収するという新しい日本学の創造を目指しています。詳細は、

本学ウェブサイトの日本学大学院 (https://www.sal.tohoku.ac.jp/japanese_studies/) をご参照ください。





グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム (Global Governance and Sustainable Development Program)

2019年4月から英語で学べる「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム(Global Governance and Sustainable Development Program:G2SD)」が走り出します。皆さんもご存じのように、本研究科には、英語で学べるコースとして「言語総合科学コース(International Graduate Program in Language Sciences)」と「ヒューマン・セキュリティと社会プログラム(International Post-Graduate Program in Human Security)」がありますが、「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム」は「ヒューマン・セキュリティと社会プログラム」を継承、発展させたものです。

既存の「ヒューマン・セキュリティと社会プログラム」は、国際文化研究科、医学系研究科、環境科学研究科、農学研究科の4つの研究科が連携し、「旧国際資源政策論講座」が学生を受け入れて教育・指導を行ってきたのに対して、「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム」は、本研究科独自のプログラムで「国際環境資源政策論」、「国際政治経済論」、「多文化共生論」、「アジア・アフリカ研究」の4つの講座が学生を受け入れ、より幅広い教育・研究ができるようになります。さらに、「災害科学・安全学国際共同大学院プログラム(2019年4月開始予定)」との連動を図っており、国際共同大学院に進学して海外大学へ

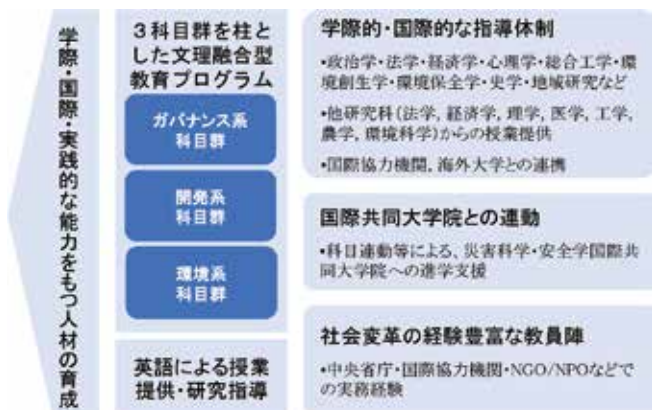
の短期留学やインターンシップに参加することもできます。

貧困、難民、環境破壊といったグローバルかつ複合的な問題の解決、2015年9月の国連サミットで採択されたSDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)の実現のためには、「グローバルガバナンスと持続可能な開発」の観点からの取り組みが不可欠であり、本プログラムは、学際・国際・実践的な能力を持つ人材の育成を通じて、上記観点から社会・経済システムの変革を先導する教育・研究を目指しております。

また、本プログラムの特色としては、「ガバナンス」、「開発」、「環境」の三つの科目群を柱とした文理融合型、分野横断的なカリキュラムを構成し、すべて英語による授業提供と研究指導を行います。国際共同大学院及び協定先の大学との連携による国際的な指導体制構築、産学官連携の推進、豊富な社会経験および国際経験を持つ講師陣による高いレベルの教育・研究を提供していく予定です。ガバナンス、開発、環境問題に関心が高く、学士の学位をお持ちであれば、どなたでも応募できる開かれたプログラムですので、皆様のご応募をお待ちしております。

G2SDの情報

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/englishcourse.html>



附属言語脳認知総合科学研究センター

本センターは、言語を基軸に文理融合型の学際的研究を実施しています。一口に言語と言っても、その関わる領域は多岐、広範囲に及びます。

現代社会はスマートフォンなどの情報テクノロジー機器が広く行き渡り、それを介して人々は様々な情報をやり取りしています。ツイッターなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス上で毎時、毎分、毎秒ごとに世界中でやり取りされている言葉を集めれば、膨大な言語資料、日常的に使用される言葉のビッグデータが得られます。それをうまい具合に解析すれば、例えば、ある国・地域で今流行しているものを知ることができるでしょう。

また、私たちが他人の発したツイートを読んで理解するとき、私たちの脳の中ではどのようなことが起きているのでしょうか。あるいは、皆さんがこの文書をお読みになり、その意味を理解するということが、神経科学的にはどのようなことなのでしょう。

最近あちらこちらでよく「コミュニケーション能力」の重要性が謳われています。その能力の中には、場面場面に適した言葉を使

研究紹介 1

外国語学習はグローバル化の波とともに近年特に注目を集めています。同時に、外国語を修得することの難しさも認識されています。本センターには、外国語学習に関する様々な問いに、脳機能画像法という手法を用いて答えようとしている研究者がいます。

最近実施した研究で、その研究者は、場面や状況から外国語を推測しながら学習する際の情動、特に不安の影響について検証しました。例えば、日本の英語教育では入試などの影響で正確性が重視される傾向があります。その結果、コミュニケーション中に失敗を恐れて話せなくなる学習者が多いのではないかと考えられます。実際、日本人の大学生が英語でコミュニケーションを行う際の脳活動を機能的磁気共鳴画像法(fMRI)により調べたところ、英語使用に不安を強くおぼえる人は、自己発話をモニタリングする脳領域と言われる眼窩前頭皮質がうまく使えず、自分の

研究紹介 2

日本は世界に類を見ない速度で高齢化が進んでいる社会です。この社会的文脈の中で、日本語などに観察される文末に用いられる表現形式の研究を行っているメンバーもいます。

言葉を介した会話の中で、聞き手は、話し手の言葉が持つ文字通りの情報だけではなく、話し手がどのような感情を経験しているかをも察知します。日本を含むアジアに押し寄せる超高齢化の波の中で、世代を超えて相互理解を図るためには、言葉を通じた感情認知の過程が加齢にしたがってどのように変容していくかを把握することが重要だと考えられます。

感情伝達を考える上で東アジア言語に共通して注目される点は、文末に話し手の命題に対する態度(モダリティ)を表すマーカーが豊富にあることです。とくに日本語では授受表現(「くれる」など)、証拠性表現(「ようだ」など)、相手に向けた丁寧語(「です」など)、さらに終助詞(「ね」など)の精緻な用法が対面コミュ

ニケーションを支えていると考えられます。これを踏まえ、当該研究者は、こうした文末モダリティ表現の使い方によって聞き手に与える印象がどう変わるか、またそれが世代によってもどう変わるかについて、質問紙、行動実験、脳機能計測(脳波、fMRI)など、様々な手法によって実証的に考察しています。

これまでのところ、文末モダリティ表現に対する感受性は母語話者であっても同様ではなく、個人差が大きいことがわかってきました。特に多様かつ複雑な使われ方をする終助詞の「ね」に関しては、他者の心的状態を適切に推し量る「心の理論」能力の高い人ほど柔軟に理解できるような結果が得られています。同じことを伝えるのでも、文末を少し工夫するだけで対人関係をより良くすることができるとしたら、世代や文化を超えた相互理解に貢献できるかもしれないという大きな見通しを持つことができます。

ここで、本センターに所属するメンバーが中心になって実施している研究を2つ紹介します。

実力を発揮できないことがわかりました(図1)。

このことから、研究を行った研究者は、まずは、発話内容の正確性ではなく、伝えようとする内容が通じたかどうかを評価し、学習者がコミュニケーション活動を楽しめるものだと思うように外国語の学習活動を工夫することが必要であろうと述べています。

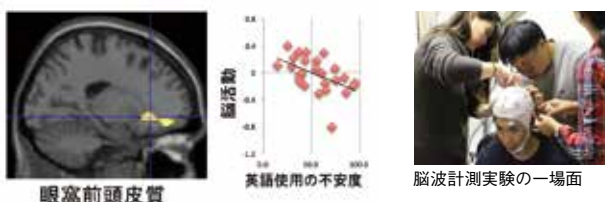


図1 日本人大学生が英語コミュニケーション課題を遂行している際に不安の度合いによって負の相関が検出された脳領域。不安が高い人は眼窩前頭皮質の活動が低い。

[研究に興味のある方へのメッセージ]

本センターは、メンバーによる定期的な研究会や外部講師を招いての講演会やワークショップなどを開催し、日々研鑽を積んでいます。また同時に、上述のような研究に関心を持ち、教員とともに研究を推進する若手研究者、大学院生の参加を期待しています。これからの10年、20年、世界の言語科学研究をリードする若手研究者の育成も重要な目的となっています。



修了者からのメッセージ



ヨーロッパ・アメリカ研究講座

平成30年3月
博士課程前期2年の課程修了

阿部 純

「支えられる存在」から 「支える存在」へ

中学校教員になることが昔からの夢でしたが、学部時代のカリフォルニア州リバーサイドへの留学を機にアメリカの人種問題に関心を抱くようになり、大学院への進学を考えるようになりました。そこで、アメリカ研究講座(現ヨーロッパ・アメリカ研究講座)が設置されている本研究科のオープンキャンパスに訪れたのですが、その時に会ったのが現在私の指導教員でもある小原豊志教授です。オープンキャンパス後にも先生と何度か面談やメールでのやり取りをさせていただくうちに研究への想いも強くなっていきました。

しかしながら、私が通っていた大学にはアメリカ史の授業が一つもなく、独学でアメリカについて勉強することは非常に困難なことでした。どうか本研究科への入学を果たしたものの、専門知識がなく英語力が

低かったために授業についていくことができず、演習発表では先生方から厳しいご意見をいただきました。研究が上手いかず、「自分はここにいるべき人間ではないのではないか」と悩んでいた私を励ましてくださったのは、博士課程およびGSICSフェローの先輩方です。先輩方からは修士論文の執筆の際にも多くのアドバイスをいただき、何度も論文の草稿を見ていただきました。このような支えがあったからこそ今の私があります。

これまでは周りに支えられてばかりでしたが、これからは周りを支える存在になりたいと思っています。そのためにも日々努力を怠らず、研究に邁進する所存です。



多文化共生論講座

平成30年3月
博士課程前期2年の課程修了

折笠 芽衣

研究生活で得た気づきを振り返って

研究室での日々を思い返すと、「切磋琢磨」という言葉が浮かびます。お互いの研究について意見交換をし合いながら過ごした日々のおかげで、様々な学びを得ることができました。

私は、研究を進めるにあたって、自分で自分の「歩み」を思考する力が重要だと感じます。自分が何に興味や問題意識を持ち、その研究を通してどこに行き着きたいのか、問い続けることは大切です。研究に取り組むなかで生じてくる数々の障壁を越えるには、自分の研究の筋道をイメージし、そこから今やるべきことは何なのかを理解していく必要があります。これは私が在学中に得た大きな気づきのひとつでした。

自分の進む道筋を頭に描くこと、そして、自分が今どの地点に立っているのか理解することができなけれ

ば、研究に対するアドバイスを周囲に求めることもできません。常に自分の研究活動の「歩み」を客観的に考えることが、周囲からのアドバイス等の支援を上手に活用することに繋がると思います。また、進む道に迷った時の軌道修正もしやすくなります。

本研究科では、それぞれの院生が実に多様な研究に取り組んでおり、他の仲間の研究に触れながらともに成長できることは大きな魅力のひとつです。私はまわりの先生方、先輩方、仲間の温かいご支援のもと、卒業まで充実した研究生活を送ることができました。今後国際文化研究科で活動される皆様にも、この魅力的な環境を存分に活用して頂きたいと思います。



言語科学研究講座

平成30年3月
博士課程後期3年の課程修了

黄 利斌

博士課程修了にあたって

日本へ留学に来てからほぼ9年になります。9年間の留学生活は長い道のりであるはずですが、あっという間に経ちました。そのうちの3年間を東北大学で過ごし、東北大学で博士号を取得したことを、心から誇りに思い、嬉しく思います。私は国際文化研究科に入学する前に、日本の民間企業に就職しておりましたが、研究者になるという夢を捨て切れず、博士後期課程への入学を決意しました。当時は、国際文化研究科が16あった講座を8講座へと改編したばかりであり、不安を抱きながら新しく発足した言語科学研究講座の第一期生となりました。入学してから、毎週の演習で統語論・意味論・語用論などの言語学諸分野を専門的に研究する8名の先生方から貴重な指摘を頂くことが多かったです。また、日本人学生の他に中国、タイやブラジルなど様々な国からの留学生が多く在籍しており、みんなで互いに励まし合い、楽しく異文化交流ができました。指導教員の副島健作先生をはじめとする諸先生方や院生仲間の支えがあってこそ、無事に

博士論文を仕上げる事ができたと思います。言語科学研究講座に入って本当に良かったいつも思っております。

「研究とは孤独なものである」と言われています。確かに、夜遅くまで一人で投稿論文や博士論文を書く辛い日々が数多くありました。また、一生懸命データを分析しても自分の問いかけに答えられないという困難な時期も長く続いていました。しかし、研究には楽しいこともあります。誰も気づいていなかったことを発見した時の嬉しさ、何ヶ月もかけて書いた論文が学術誌に採用された時の喜びや徹夜で博士論文を仕上げた時の達成感は、今でも鮮明に覚えています。この3年間で、研究することの辛さ・難しさ・楽しさを十分に味わうことができました。これは私の一生の宝物になります。当然、博士号の取得は研究の終わりではなく、自立した研究者としての第一歩です。これからも自分の夢に向かって頑張っていきたいと思います。





退職教員からの言葉



国際日本研究講座
教授

藤田 緑

美しい学問

過日、恩師の芸術院賞・恩賜賞受賞を祝う会があり、その折に「美しい学問」という言葉が久しぶりに恩師から発せられた。学問は美しくなければならない。当時、その美しい学問の実相について語られることはなかったが、研究室の金科玉条だったその言葉を、私なりに学問に対する公正さ、独創性、不断の努力、謙虚な姿勢と解した。今では、制度も研究環境も大きく様変わりしたものの、その本質は不変、否、今ほど美しい学問が求められている時代はあるまい。

東北大学に私が赴任した平成元(1989)年は、ちょうど教養部改革の時期に当たったが、結局は解体され、1993年発足の本研究科・言語文化部に配属され

た。当初、修士1年生には最初に研究の要である資料の検索法を指導した。口にごそしなかったが、「美しい学問」の第一歩のつもりであった。現在のようにウェブ上で世界中の図書館ばかりがデジタル化した稀覯本にもアクセスできる時代の到来など思いもよらない時の話である。利便性は格段に高まったが、落とし穴もある。新たな研究倫理が求められる所以でもあろう。

「美しい学問」の伝統が国際文化研究科でも根付くことを祈念しつつ、最後に同僚や事務の方々に御礼を申し上げたい。「美しい」と言えるかどうかはともかく、29年にも及ぶ東北大学における学究生活を曲がりなりに全うしえたことに感謝を籠めて。



国際政治経済論講座
教授

横川 和男

私の国際経済論

私は国際政治経済論講座や前身講座の教員として、国際経済関係論、国際経済政策論において貿易の実証研究と国際マクロ経済学を教えて来ました。産業連関表や数量的一般均衡モデルを用いた貿易政策効果の推計やその地域分解、貿易に含まれる生産要素の計測は、地域活性化策や公共プロジェクト、環境政策の効果の数量化、それらの政策デザインにも共通の方法です。政策提言側は正の効果を強調しますが、負の効果の及ぶ先を知ることも政策シミュレーションの大切な役割です。マクロ経済政策の国際的

波及の研究からは、金融市場の国際的なリンクが進むと、財政による経済活性化策の効果は、単純に各国が経済規模に応じて享受する傾向が強まり、政策実行国では負担が恩恵を上回る可能性が示唆されます。これより国際経済協議の場での負担の押し付け合いは、醜態でなくむしろ自然な姿であるなど、経済政策を巡る政治的駆け引きについて重要な視点が得られます。



多文化共生論講座
教授

石幡 直樹

不易流行

国際文化研究科創設から25年の間に4つの講座に所属しました。最初の言語文化交流論は、英国、ドイツ、ロシア、中国、朝鮮、日本の語学と文学の融合研究を試みました。続いて移った新設の言語応用論は、英国、ドイツ、アメリカ文学を材料にしてアングロサクソンとゲルマン文化を統合的視点から捉えようとしてきました。次に講座改編で生まれた多元文化論は、ヨーロッパやアメリカの歴史、社会学、文学を中心に錯綜する文化が混在する社会の状況を読み解こうとしました。系統合を経て最後に籍を置いた多文化共生論は、

ヨーロッパの人文文学を対象に多文化時代の文化・芸術の共生の様相を考察しています。テーマは目まぐるしく変わりましたが、変化の中に普遍を求めることこそ本研究科の変わりぬ姿勢だと感じています。英国の世紀末唯美派の小説家ワイルドも“*It is only the modern that ever becomes old fashioned.*”(旧式になり得るのはモダンなものだけだ)と言っています。



新任教員紹介



国際日本研究講座
准教授

クリントン・ゴダール

2018年4月に国際文化研究科国際日本研究講座の准教授として着任いたしましたクリントン・ゴダール (Clinton Godart) と申します。出身地はオランダです。日本在住は合わせて9年ぐらいになります。専攻は近代日本思想史です。

ベルギーのルーヴェン・カトリック大学に入学した時、哲学を専攻しました。しかし、授業の内容は西洋の哲学しかありませんでした。「ヨーロッパ以外の地域での哲学は?」と思い、仏教や儒教思想を独学し始めました。2年後、東アジア学部にて転学し、日本語の勉強も始めました。そして、2000年に初めて日本に留学する機会を得て、大阪外国語大学(現在:大阪大学の箕面キャンパス)に一年間留学し、その後、大阪外国語大学で修士課程に入学しました。修士課程では、明治時代の日本の仏教徒が西洋の「哲学」をどう理解したか、その理解を踏まえて「仏教」をどう再考察したか、という問いを中心にして明治時代の思想史を勉強し始め、仏教思想家の井上円了について修士論文を書きました。

2004年に米国のシカゴ大学大学院に入学し、より広く近代思想史と歴史を学び、2008年に博士号を取得いたしました。その間2年ほど京都大学の日本哲学史研究室にも所属しました。シカゴ大学での授業

の内容は、地理的にも、時間的にも非常に幅が広いので、世界史と科学史に視野が広がりました。科学史についての授業は、ダーウィンと進化論の思想史へ私の興味をかき立てました。そして、「近代日本の進化論受容」を博士論文のテーマとして選びました。シカゴ大を卒業した後、本学に着任するまでに、英国ケンブリッジのニードハム東アジア科学研究所、米国の南カリフォルニア大学、北海道大学で研究・教育を続けてきました。

現在の研究テーマは、近代日本社会における、仏教、科学思想、イデオロギーの接点とそれらの発展です。近代日本社会に大きな影響を与えた日蓮主義とアジア主義のテーマ(東北地方で盛んだった東亜連盟運動)にも取り組んでいます。近年、歴史分野で注目されている「感情史」のプロジェクトにも参加しています。主に近代日本思想史を研究していますが、常に同時代のアジアや欧米の思想史の大きな流れについて考え、欧米とアジアの歴史・思想史・宗教史・軍事史も読み続けています。私が教えている授業でも、学生の視野を世界史に広げることが目標の一つです。本学では、これまでの経験を土台にして、さらに教育と研究を発展させていきたいと思っております。



言語科学研究講座
講師

中山 真里子

2018年4月に言語科学研究講座に着任いたしました中山真里子と申します。専門は心理言語学で、その中でも言語の基本要素ともいえる単語の処理過程に興味があります。主な研究対象は、第一言語話者による日本語および英語の単語処理と日英バイリンガルによる英単語の処理のメカニズムです。モデルやそこから導き出される仮説に対して実験心理学の手法を使った実証的な研究を行っています。

私は、大学で英米語を専攻(日本語教育を副専攻)していたように、もともと言語に興味を持っていました。大学在学中に1年間休学してアメリカの大学に留学をしたのですが、そこで心理学という学問に出会い、その面白さに魅了されました。大学卒業後は、数年の社会人生活を経て、カナダの大学に留学し、心理学を新たに学部から学び直し、そのまま修士課程に進

学しました。修士号取得後は、早稲田大学に進学し心理学分野の博士号を取得しました。カナダで心理学を学び始めた早いうちから、言語と心理学への興味を融合させたいと思い、学部4年生の時に言語研究ができる心理学の研究室に所属しました。それから十数年間一貫して心理言語学の研究に携わっております。

言語科学研究講座は言語に興味があり、言語の本質を様々な角度から探究し解明することを試みる研究者の集まりと聞いております。私も講座の構成員として、同じ目標を持った教員と学生達と知的に共に楽しみながら、日々研究に従事していきたいと思っております。

研究紹介

ICT応用言語教育開発研究

応用言語研究講座 教授 杉浦 謙介

ICT(情報通信技術)を言語教育に応用すると、①言語教育用のデジタル教科書(教科書のページ、音声ファイル、動画ファイル、さらに、外部Webサーバーのページや動画ファイルなどを系統的に1つにまとめる可変教科書)、②CALL(Computer Assisted Language Learning)教材(コンピューターが言語学習を支援する教材)、③言語教育用eラーニングシステム(言語教育に最適化されたテスト機能や辞書機能や発音評価機能などをもったeラーニングシステム)などを開発することができます。このような教材やシステムを開発し、教育現場で使用し、これにもとづいて研究していくのが、ICT応用言語教育開発研究です。

2003年に東北大学にCALL施設ができました。これによって、東北大学にICT応用言語教育を最大限まで実施できる場所ができました。また、同年、国立七大学外国語教育連絡協議会の下に国立七大学外国語CU委員会(CU: Cyber University)が設置され、私はその委員になりました(継続中)。これによって、私は、ICT応用言語教育用の教材やシステムを七大学(北大・東北大・東大・名大・京大・阪大・九大)で共同開発することになりました。私は、この委員会のなかでCALL教材(『CALLドイツ語』)や言語教育用eラーニングシステム(WebOCM / WebOCMnext)などを開発し、これらを東北大学のCALL施設(私はその管理・運営をしています)のサーバーに置いて、ドイツ語の授業で使用し、これにもとづいて研究しています。

今日、人工知能の開発が進んでいます。人工知能の同時翻訳・同時通訳によって、さまざまな言語(手話を含む)の母語話者どうしが、それぞれ自分の母語を使って意思疎通できるようになりました。これまでは、たとえば、日本語母語話者と中国語母語話者とロシア語母語話者が話し合うとき、この3人は英語を介して意思疎通したかもしれません。しかし、これからは、3人は、自分の母語を使い、人工知能を介して意思疎通します。つまり、介在言語(世界共通語)としての英語に代わって人工知能が介在することになります。そして、もし、この3人にフランス語手話母語話者とアラビア語手話母語話者が加わっても、5人は、自分の母語(音声言語・手話言語)を使い、人工知能を介して意思疎通します。人工知能は、すべての音声言語ばかりではなく、すべての音声言語とすべての手話言語の間に介在することになります。

もちろん、介在なしで友人や恋人と直接に意思疎通したい場合、あるいは、ある言語の背景にある文化を知りたい場合などは、その言語を身につける必要があります。人の行き来が多くなり、文化間の交流や対立が増える今日、さまざまな言語を身につける必要性は大きくなっています。また、ある言語圏に行くときに、少しでもその言語と文化を学んで行くのは最低限の礼儀ですね。言語を学ぶときには、人工知能を利用すると楽です。言語教育用eラーニングシステムWebOCMnextも、すでに人工知能APIを使っています。



【画像1】CALL教材『CALLドイツ語』

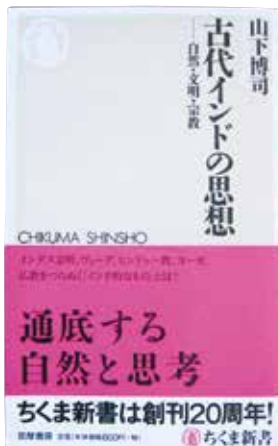


【画像2】言語教育用eラーニングシステムWebOCMnext

最近の著作から



多文化共生論講座
山下 博司 教授



『古代インドの思想
—自然・文明・宗教—』
山下博司著、ちくま新書、2014年。

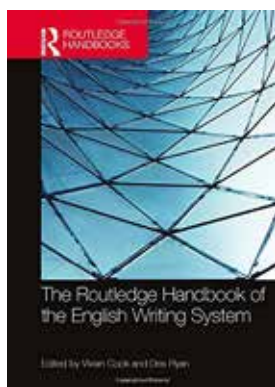
人類学者・マリノフスキが「文化とは環境に対する適応の仕方である」と述べたように、文化と環境の相関は文化学にとって普遍的な問題の一つである。人類の歩みを自然の変化において捉える「文化史としての自然」という見地も認知されつつある。特に気候と文明の関係は、エルズワース・ハンティントン以来論壇を賑わせてきた。本書は、環境決定論の陥穽を注意深く回避しながら、古代インド思想の形成・発展に照準を定め、文明と自然環境との関係性について論じたものである。インド思想史を扱う書物に、この視角に立つものはない。

西方から亜大陸に侵入したアーリヤ人にとって、モンスーンとの出会いは運命的なものであった。本書は先史文明から説き起こし、リグ・ヴェーダ、ブラーフマナ、ウパニシャッドとサンスクリット文献を下りながら降雨と文明の問題を紐解いていく。ウパニシャッド期に顕在化した精神史の新機軸は、祭祀から自己へと視点の転換を促し、重きをなしつつあった輪廻や解脱の考え方と強固に結びついて、仏教、ジャイナ教の生成へと連なり、思想活動の中心も、パンジャブからガンジス中流域へと東漸していく。地理的遷移は乾季と雨季の交替を特徴としつつも降水量の漸増を不可避免的に随伴し、乾燥地域から湿潤地域へと思想の舞台も推移していくことになる。仏教教団の成立もこの文脈で吟味される。

大震災の被災経験は自然と人間の関係を熟考させ、本書の執筆を促した。実に想い出深い論放である。



応用言語研究講座
岡田 毅 教授



*The Routledge Handbook of
the English Writing System,*
Routledge (2016)

ISBN: 978-0-415-71597-3 (hbk)
ISBN: 978-1-315-67000-3 (ebk)

2018年6月現在で18冊を数えるRoutledge社の言語学に関するハンドブックシリーズ、Routledge Handbooks in Linguisticsは、言語学研究の幅広い分野に関する最新の知見も含めた分厚いシリーズです。それぞれが世界屈指の言語学研究者によって編集され、さまざまな研究者が執筆者として貢献しています。高学年次学部生および大学院生にとっては必須の文献でもあります。2016年7月14日に上梓されたThe Routledge Handbook of the English Writing System (全544頁)は、英国Newcastle大学名誉教授Vivian Cook博士と、アイルランドTrinity Collegeの若手研究者Des Ryan博士によって編集されています。

世界中でハイパーな位置を占める英語という言語の書記体系をめぐって、(1)その理論的な側面、(2)その発展の歴史、(3)その習得と教育、(4)世界各地の社会との関係、(5)書き言葉としての分析、という多様な角度からの合計29の章で、このハンドブックは構成されています。

その中の第23章Japanese uses of the English writing system: A case study (pp.397-412)を担当しました。そこでは、「最も複雑な書記体系を持つ言語のひとつ」(Cook 2004)である日本語の中で、英語の書記体系がどのように取り入れられ、同化し、変貌しているのかを扱いました。ローマ字表記の問題、仮名・漢字使用との関係、日本語固有の短縮形形成規則などにも触れ、筆者の専門分野であるコーパス分析の立場からの知見も加えました。後半部分では、日本という社会の中で英語が日常的にどのように表記されているかを公式・非公式な文脈も含めて、ケーススタディとして紹介しました。タクシーの運転席側のドアに見られる「右から左」方向への文字配置につられて、IXAT (TAXIのこと)のように、英語の単語ですら反対方向で綴られるというような特殊例も(仙台の光タクシーの写真も使って)紹介し、日本語の中で広く用いられている英語がいかにかに日本語独特の流儀で表記されているかを明らかにしました。



平成30年度科学研究費補助金採択一覧

7月1日現在

氏名	研究種目名	研究種目名		研究課題名	備考
大河原 知樹	15H03286	基盤研究B	継	債権法を用いた「現代中東法」のモデル化とその比較法的考察	補助金
プシュパラル ディニル	16H05648	基盤研究B	継	日本、インドネシア及びスリランカにおける津波が発生しやすい地域の脆弱性評価	補助金
佐藤雪野	17H02227	基盤研究B	継	EUにおける難民の社会統合モデルドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題	補助金
池田 亮	17H02487	基盤研究B	継	1950年代の中東と北アフリカにおける冷戦と脱植民地化	補助金
岡田 毅	18H00683	基盤研究B	新	大学入試改革を契機とする新しい高大接続英語教育用eラーニングパッケージの開発研究	補助金
小野尚之	26370558	基盤研究C	継	生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究	基金
鈴木 美津子	15K02290	基盤研究C	継	ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象	基金・名誉教授
Jeong Hyeonjeong	15K02745	基盤研究C	継	明示的・暗示的言語知識テスト開発と個人差・脳科学的アプローチによる検討	基金・期間延長
劉 庭秀	16K00668	基盤研究C	継	次世代自動車普及に伴う課題導出と対策に関する研究―適正処理と再資源化を中心に―	基金
佐藤 研一	16K02525	基盤研究C	継	啓蒙ヨーロッパ文学にみる非ヨーロッパの衝撃―ドイツとイギリスを中心にして	基金・名誉教授
藤田恭子	16K02554	基盤研究C	継	ルーマニアのドイツ語話者諸集団のアイデンティティ形成とドイツ古典主義文学受容	基金
鈴木道男	16K02599	基盤研究C	継	ディアスポラ・アイデンティティの解体と記憶の抵抗―文学の紐帯機能の綻びと修復―	基金
黒田 卓	16K03069	基盤研究C	継	ガーニャール朝末期イランにおける地方政権の興亡	基金
深澤 百合子	16K03150	基盤研究C	継	擦文からアイヌへ食生活形成の考古学的研究	基金・名誉教授
吉田栄人	16K03213	基盤研究C	継	メキシコにおける多文化主義と先住民の文学的実践	基金
井川真砂	17K02534	基盤研究C	継	マーク・トウェイン晩年のユーモア―(笑いの武器)による批評精神	基金・名誉教授
中本武志	17K02670	基盤研究C	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
中山 真里子	15K04194	基盤研究C	継	日英バイリンガルの視覚的単語認識：L2表記表象と処理システム詳細の解明	基金(立教大学から)
勝山 稔	18K00310	基盤研究C	新	民間の視座を導入した中国通俗文学の「自国化」の研究―受容文化の多角的戦略―	基金
市川 真理子	18K00365	基盤研究C	新	近代初期イギリスの商業劇場における楽屋正面壁の構造と使用方法に関する総合的研究	基金
高橋大厚	18K00520	基盤研究C	新	言語における経済性条件の再検討	基金
Jeong Hyeonjeong	18K00776	基盤研究C	新	外国語学習を通じた情意や社会性の育成：認知神経科学からの検証	基金
杉浦謙介	18K00820	基盤研究C	新	外国語eラーニング教材の仕様最適化―学習効果・使用者評価・学習実態に基づく研究―	基金
志柿光浩	18K00820	基盤研究C	新	大学外国語教育プログラム内評価に適合したスペイン語スピーキング能力測定手法の開発	基金
野村啓介	18K01021	基盤研究C	新	第二帝制下フランス外交の異文化経験と極東戦略に関する基礎研究	基金
青木俊明	18K04382	基盤研究C	新	潜在的限界集落地区における社会的ネットワークを活用した生活の質の維持・改善	基金
堀田智子	18K12418	基盤研究C	新	日本語学習者のヘッジ表現の習得過程―中間言語用論の観点からの考察―	基金
周振	18K12440	基盤研究C	新	中国語学習を支援するためのデータベースの構築	基金・GSICSフェロー
勝間田 弘	17K01117	基盤研究C	継	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金
山内 玲	17K13405	若手研究B	継	アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海文学・思想の受容と影響に関する研究	基金
帆北智子	17K13555	若手研究B	継	近世ヨーロッパの貴族世界と政治・外交ネットワークに関する基礎研究	基金・GSICSフェロー
妙木 忍	17K17596	若手研究B	継	医学的なまざしと女性の身体―解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究―	基金
KLAUTAU Orion	17K17601	若手研究B	継	村上专精の基礎的研究	基金
山下 博司	16K13172	挑戦的萌芽研究	継	インド映画の“新しい波”[新中間層シネマ]の誕生―インド映画研究の確立を視野に―	基金
江藤 裕之	16K13254	挑戦的萌芽研究	継	英語圏、準英語圏における英語アカデミックライティング教育の実態調査とその応用	基金
佐野 正人	16K18476	挑戦的研究(萌芽)	継	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究―戦後初期と1990年代を中心に―	基金
池田 亮	16KK0071	国際共同研究 加速基金 (国際共同研究強化)	継	中東・北アフリカとアジアにおける冷戦と脱植民地化の相互作用の比較研究(国際共同研究強化)	基金



INFORMATION

キャリア講習会 「社会に出て働くために必要な知識と技術 —大学院生の就活アドバイス—」

国際文化研究科では、キャリア支援の一環として、年に一度、就活や仕事のことなど、在学生の進路形成に役立つ話を修了生に直接お話しいただく機会を設けている。昨年度は12月6日に崔文穩さんをお招きし「社会に出て働くために必要な知識と技術—大学院生の就活アドバイス—」と題する講話をいただいた。崔さんは中国からの留学生で、2012年に本研究科修士課程(言語文化交流論講座)を修了し、現在は計測機器大手の日系企業で活躍している。日本で就職するか、帰国するか迷ったそうだが、日本に残って自分の語学の才能を活かそうと決めた。崔さんは、就職活動に役に立つ知識、就職してからこれまでの経験を中心に語ってくれたが、後輩に向けての社会人としての心得といった人生の教訓となるような話もあった。他研究科からの参加者もあり、アンケート結果も好評であった。とくに、日本で就職を考えている外国人留学生には有益な助言が多かったようである。(江藤裕之)



国際文化基礎講座 「映像とイメージのカレイドスコープ」

本年度の公開講座は「映像とイメージのカレイドスコープ」と題し、映像や映画にスポットを当てた。1895年にリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明し、人々は今までになかった実際の像を光学的、電気的に再現・記録した映像を手に入れることとなった。それから1世紀余りが経過した現在、映像は社会にとって必要不可欠なものとなり、文化の一翼を担う存在となった。今回の公開講座では①映画に潜む

時代的背景の考察として、寺本成彦講師による「小津安二郎の“戦争”一忘却への抵抗としての映画—」②映画による文化受容の考察として、佐野正人講師による「最近の韓国・中国映画のトレンドをめぐって—岩井俊二『Love Letter』からの影響を中心に—」③映像によるイメージ表現とメッセージ性の考察として、山内玲講師による「マイケル・ジャクソンの“Black or White”にみる多文化主義とアフリカ系アメリカ人の歴史」が開催された。各回ともに活発な質疑応答が行われ、充実した議論が行われた。(勝山稔)



国際文化学会報告：学会の休会について

東北大学国際文化学会は「国際文化研究」という新しい学問分野において、学際的アプローチにより独創的な知識を育てていく学会として、東北大学大学院国際文化研究科が発足した翌年の1994年に設立されました。以降、本学会はほぼ四半世紀にわたり年次大会の開催や学会誌の刊行をつうじて、人文や社会科学、自然科学の諸分野における伝統的な理論や分析方法を越えた新しい研究アプローチを開拓してきました。しかしながら、学会運営を支えるマンパワーの不足など本学会のありかたについて見直しを迫る声が数年前からあがっていたことも事実であり、平成29年7月26日に開催された本学会の第24回総会において本学会の休止が決定しました。なお、総会では、学生の研究成果発表の場を確保するために、今後は研究科に方策を講じてもらうようお願いすることが決議されました。大変残念なお知らせになりましたが、国際文化研究の理念は学生主体の研究会に引き継がれています。この場がやがて新たな学会の設立につながることを祈念しています。(小原豊志)



シンポジウム

「日本映画の現在/日本映画研究の現在」開催

2018年3月28日、マルチメディア教育研究棟6階ホールにて、科長裁量経費によるシンポジウム「日本映画の現在/日本映画研究の現在——国際的視座から」が開催されました。このシンポジウムは、近年の国際映画祭で日本映画が非常に高い評価を集めている現状を勘案し、国際的な視座からその意義を検討するために企画されました。今回、お招きした講師は、小川佐和子氏(京都大学人文科学研究所助教、1920年代の比較映画史)、川崎公平氏(日本女子大学人間社会学部講師、黒沢清研究)、シュザンネ・シェアマン氏(明治大学法学部教授、成瀬巳喜男研究)のお三方で、いずれも当該分野で優れた成果を発表されている方々です。シンポジウムでは、各先生方のご講演後、フロアから様々なご意見やご質問が寄せられ、先生方との間で活発な議論が交わされました。今後もこのような形のシンポジウムを開催出来ればと考えております。(坂巻康司)

講演会「近代国家・中国の「夢」と課題——
“中華民族”概念を手がかりに」

2017年8月2日(水)13時~14時30分、東北大学川内北キャンパス講義棟C202にて、平野聡(東京大学法学部・教授)を講師としてお迎えし、「近代国家・中国の「夢」と課題——“中華民族”概念を手がかりに」と題する講演会を開催した。講演会では、平野教授はいま流行の「中国夢」や「一帯一路」と関連づけながら、中国と、西洋・日本・近代化、あるいはより大きく捉えて「与世界接轨」というキーワードの真意に迫り、近代国家としての「中国」の歴史を問い直す試みを行った。当日は、国際文化研究科の院生だけでなく、他研究科の学生や若手研究者も集まり、活発な議論が行われ、大変有意義な盛会となった。

(朱琳)



公開シンポジウム

「東アジアの大学における特色ある英語教育
サポートシステム——香港と日本の例から——」

2018年3月3日、東北大学川内北キャンパスにて、公開シンポジウム「東アジアの大学における特色ある英語教育サポートシステム——香港と日本の例から——」を開催した。今日、大学では論文執筆やプレゼンテーションのための実践的なアカデミック英語の運用能力

の強化が求められているが、授業だけではカバーできず、学生の自主的な学習が重要なカギとなる。そこで、英語自主学习支援に際立った成果を上げている香港理工大学のBruce Morrison教授、香港科技大学のKeith Tong教授、神田外語大学のNeil Curry講師をお招きし、それぞれの大学における実践をご報告いただいた。いずれも英語教育の専門家であり、各大学のELC(英語センター)やSALC(英語自主学习センター)の責任者でもある。印象的だったのは、スタッフが丸となって英語教育改革にかかわっていくことの重要性を説かれていたことだ。長時間にわたる通訳なしの英語によるシンポジウムであったが、聴衆の皆さんは熱心に聞き入っていた。

(江藤裕之)



入学を希望される皆様へ

春季入学試験は、平成31年2月14日(木)、15日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html>をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

